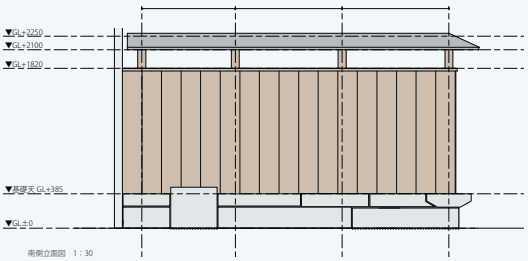
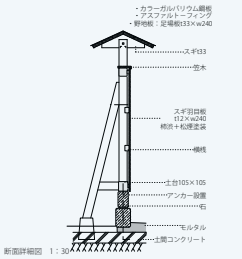
名城大学による
有松での活動報告の展示

学生による景観に配慮した塀の制作

名古屋市緑区、旧東海道沿いの有松の街の中にある大規模な町家の塀。もともと通りに面して建っていた古い鉄骨ガレージを撤去し、有松の歴史的街並みに調和した新しい塀をつくりたいとの依頼にこたえてつくられました。
高さや板の張り方・屋根は、隣接する明治時代の塀や昭和 30年代の塀と調和するよう伝統的な板塀のデザインを踏襲しつつ、金属板一枚葺の屋根や三角の垂木板を用いて、シンプルで現代的な表情となるよう工夫しています。基礎の石積みは、庭から掘り起こされた昔の門柱の礎石や石垣の間知石・棒石など 20数点を複雑に組み合せたものです。石積み＋板という形式は有松の塀のスタイルの一つですが、そこにこの家のこれまでの歴史や生活を継承する意図を重ねています。
設計は名城大学柳沢研究室にて行い、施工も大工・中村武司氏の指揮のもと研究室の学生たち 20人以上が、解体から穴掘り・石積み・木材加工・建て方・古色塗装に至るまで、全面的に作業に参加しました。工事にあたっては名古屋市の「町並み保存事業補助金」による助成を受けました。



南側立面図　1：30



断面詳細図　1：30

改修後の様子。街の景観になじんだ落ち着いた雰囲気に

東側

7月 31 日の中日新聞夕刊。有松での研究室の取り組みを紹介していただきました。

屋根周りのディテール

裏側

裏の工事の様子

実測調査

50 パターンの塀を作成・検討

古いガレージの解体

基礎工事

石組み。かつての門柱の礎石を据えている

加工場での刻み作業

古色仕上げ。配合のパターンも細かく検討された

建て方

竣工時の餅投げ

設計期間：2014 年 12 月～ 2015 年 2 月
工事期間：2015 年 3 月
所在地：愛知県名古屋市緑区有松　服部良也邸
設計：名城大学柳沢研究室（柳沢究・山本将太・及部友菅・加藤大誠・國防匠・長屋美咲・松田彩花）
施工：工作舎中村建築（中村武司・佐藤俊伸）＋名城大学柳沢研究室（山本将太・岡田一輝・市村千春・大野谷浩・及部友菅・加藤大誠・川端一輝・國防匠・長屋美咲・松田彩花・渡辺愛理・今江将吾・遠藤結夏・保浦開・川胥梓・児玉春香・河合栄拓・鈴木友之・鈴木結貴・髙間智子・竹内久美子・古川千由希）
企画・監修：究建築研究室

構造・規模：木造、高さ／ 2.2m、長さ／ 11m（東西 3.5m ＋南北 6.5m）
主な仕上げ：
屋根／カラーガルバリウム鋼板一枚葺
壁／杉板 t12 ＋古色仕上げ（柿渋・松煙）
軸組／桧＋古色仕上げ、基礎／石積み

町家を大学施設として活用する事例の調査

柳沢研究室では、有松の歴史的建築物を名城大学の施設として、活用していこうと考えています。
近年町家などの歴史的な建築を、大学の施設として活用する試みがあります。歴史的建築物を大学施設として活用していくことで、地域と建築物、大学の三方にとって以下の様なメリットがあると、私達は考えています。歴史的建築物にとっては、維持やメンテナンスなどにかかる経済的負担を軽減することが可能になると考えます。地域にとっては、学生の積極的な試みや活動による刺激が、地域を元気にする起爆剤になり得るのではないかと考えます。大学にとっては、ＰＢＬ教育や地域貢献が求められてる現在において、地域と連携した活動の拠点としての価値があると考えます。

しかし、町家を大学の施設として継続的に活用していくには、地域との関係構築や持続的な活用・運用方法など様々な課題が予想されます。

そこで、滋賀県・京都市にある 5つの先行事例の調査を行いました。
今回の調査で特に注目すべきポイントは

- 町家を大学施設として活用する上で、町家と大学との距離は大きな課題である。
- 学生による自主的な活動が、町家を継続的に活用し、地域に開いた存在にする上で重要である。
- 町家を地域と大学との節点として位置づけ、学生の地域行事への参加や、大学と地域住民からなる運営組織を設立によって、地域による大学の存在をより身近なものにしている。
- 町家を地域と大学との節点として位置づけ、学生の地域行事への参加や、大学と地域住民からなる運営組織を設立によって、地域による大学の存在をより身近なものにしている。

の４点になります。

京都学園大学

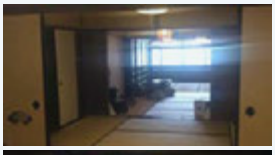
京都学園大学は町家で授業やオープンキャンパスを行うなど、町家を大学キャンパスとして日常的に活用している大学です。また、日本文化を学ぶ授業の一環として、町家のしつらえ替えや、掃除なども学生によっ行われてるのも印象的でした。夜間や休日は、大学が年に 15回企画する市民講座の会場としても活用されています。

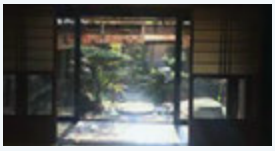
長浜バイオ大学

長浜バイオ大学が活用している町家では、キャリア系科目の授業の教室として利用されている他､学生による複数の自主活動団体が､勉強会や報告会の場として活用していました。また、地域住民を対象にした科学実験や WSの会場、地域活動参加時の学生控え室など、地域との接点としての使用が多く、町家が地域交流と学生の自主的な活動の場として働いている点が特徴的でした。

龍谷大学

龍谷大学が活用している町家では、地域連携事業と学生活性化事業の２つを軸として取り組みが行われています。前者では、日本文化を継承するための教室や展示、講演会などを、後者では有志による学生企画委員会「京まちや七彩コミュニティ」が主体となって、活動の企画・運営を行っています。
また、大きな庭を備えており、庭を利用した地域交流を図っている点も注目すべきポイントです。





京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学が活用している町家では、まちづくり活動に取り組む研究室の拠点として、また研究室による展覧会の会場として使われています。また頻度は少ないものの、海外から講師や学生を招聘した際の、WSを会場としても利用されていました。さらに当該町家の改修や活用を題材とした WSや町家を使用した実測調査の授業など、教育的な活用がなされている点が注目されます。

同志社大学

同志社大学が活用している町家では、研究コースの学生による活用が主になります。町家のかまどを使用した食育系の WSや、有機農法野菜を販売する朝市などが行われてきました。また、認知症者を対象とした日曜カフェの会場としても使用されるなど、通常の校舎では実施が難しい町家ならではの社会実験が行われているのが特徴的でした。

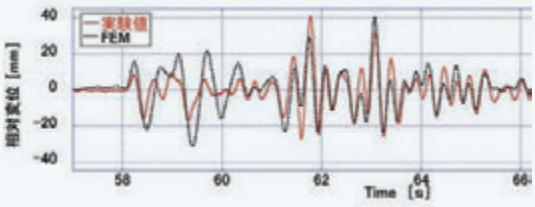
歴史的な木造建築物の耐震補強研究

武藤研究室では、地域に残る良質な建築物を適切に保存し、耐震性能の確保を始めとする安全性と機能性を向上させつつ利活用を促進し、より良い建築文化を地域から育むことを目的として活動を行っています。その一環として有松町の服部良也邸の耐震補強について調査検討を行っています。

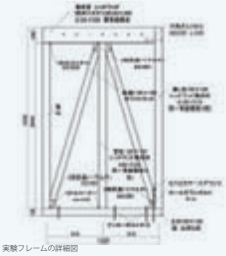
その土台として、武藤研究室では、３次元振動台による実大の試験体により、強震時の挙動の把握と解析での追跡を行っています。また建物規模での挙動や補強案の検討を具体的にするとともに、古民家専用の風合いのあるダンパー等の開発や、デジタルファブリケーションを用いた構造補強エレメントの設計・施工についても検討を重ねています。

一方で歴史的な木造建築物の耐震補強検討も行っています。2014年度には、名古屋市天白区にある古民家の構造補強の調査検討を実施し、第一弾の補強工事がされました。また同建物は、2015年度に名古屋市の登録地域建造物資産第 143号として、認定を受けました。

今後は服部良也邸の具体的な構造補強案の検討及び、歴史的建築物に調和した構造補強材の設計・施工の検討を重ねていこうと考えています。



フレームの震動実験と解析コード検証



実験フレームの詳細図

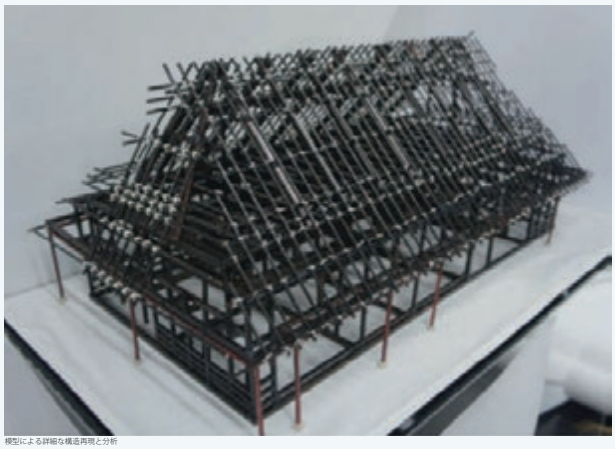
構造補強を行った八幡閣（名古屋市天白区）の補強後の外観写真の様子

構造補強を行った八幡閣（名古屋市天白区）の補強後の内観の様子

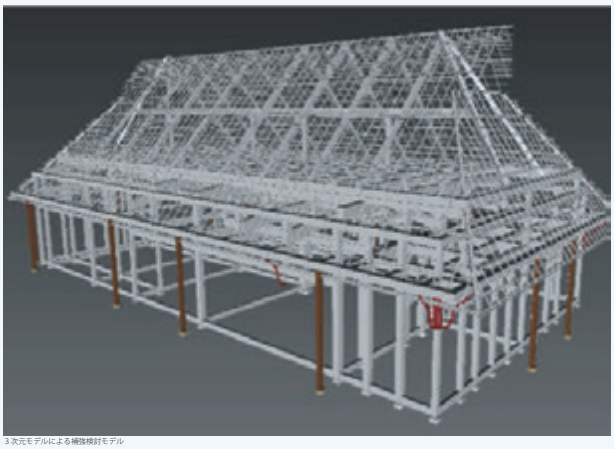
服部良也邸でのゼミ活動の様子

デジタルファブリケーション技術の検討

服部良也邸におけるゼミ活動時の集合写真



模型による詳細な構造再現と分析



３次元モデルによる補強検討モデル

明以外の推薦認めず

本会議での審議要請

憲法裁判所長官が解説

活動が新聞にも掲載されました。

服部良也邸でのアートイベントの開催

三浦研究室には四回生 9名と三回生 10名が所属しており、建築および庭園の歴史・設計を専攻とし、パブリックアートの企画・運営といった活動を行っています。視覚芸術(建築、庭園、パブリックアート)を中心に、何かをつくることと、それを理解する過程との関連を追及しています。

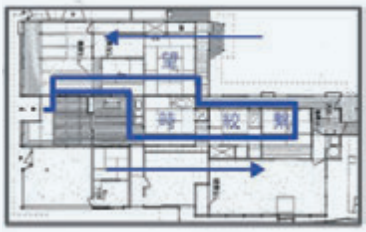
過去に行った活動事例として、オープンキャンパスでのインスタレーション、地下鉄公共空間を使用したインタラクティブ・アートなどがあります。

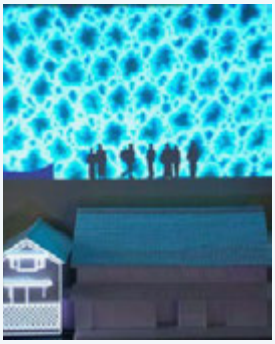
「町家光のアートイベント (コミンカノミカタ)」は愛知県名古屋市緑区有松にある古民家、服部良也邸にて行いました。開催の発端は、我々のオープンキャンパスでのプロジェクションマッピングをご覧になられた名城大学柳沢准教授からお話を頂いたことです。同准教授の有松講演に合わせ、2015年度から名城大学 MS-26の推進支援事業の一環として企画が始動しました。

このイベントの目的は以下の2つとしています。

・一般公開する服部邸でイベントを開催し、家主に古民家の公開方法を提案する。

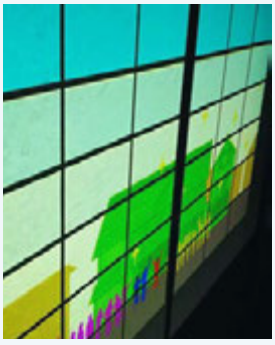
・有松の歴史や、伝統工芸品である有松の絞りをより多くの人に知っていただく。



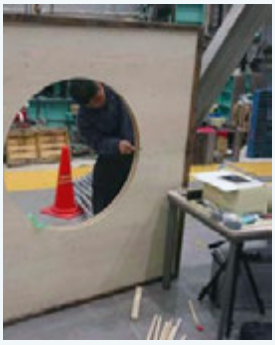


時の間 時の間では古民家が建ってから現代に至るまでの歴史をテーマとしたプロジェクションマッピングを行いました。服部良也邸は 100年以上の古い歴史をもち、その古民家が建つ地である有松のはじまりとこれからを、その当時起きた出来事も交えながら動画でユニークに表現しました。蔵や瓦の装飾、木材による細いスリットなど細部に至るまで追究し完成度の高いものを目指しました。

絞の間 絞の間では名前の通り、国の伝統工芸品にも指定されている有松絞りの新たな魅力を伝えるためのインスタレーションを提案しました。衣類に使用されることの多い絞り染めの布で様々な模様の行燈を作り、それぞれ明かりを灯して部屋に配置しました。この行燈に使用した布は地元の濱島絞染工さん、marimomenさんにご協力いただきました。



繋の間 繋の間では「町家光のアートイベント (コミンカノミカタ)」が開催に至るまでの経緯をアニメーションと簡単な話を交えながら来場者の方に紹介しました。このアートイベントは多くの人の繋がりがあったお蔭で開催に至ることができました。そんな人々の繋がりに焦点を置き、何故このようなイベントを行うようになったかをストーリー仕立てにしてアニメーションを作成しました。



望の間 望の間では庭には直接手を加えず見せ方を工夫することによって、古民家の庭の良さそのものを伝えることができるのではないかと考えました。庭の見せ方に禅の精神を取り入れ、本来服部邸にはない丸窓を自分達で作り設置し、その丸窓を通して外の世界 (庭)を見てもらうようにしました。その丸窓から外の世界を見ることで、直接見るときとはまた違った本来の自然を見ることができます。

有松と大学が連携する様々な試み

柳沢研究室では昨年度、有松絞りや服部良也邸を題材に様々な取り組みを行ってきました。
9月には無印良品店の OpenMUJIにて、まり木綿さんと一緒に WS行いました。
また 12月には名城大学の学生を対象にした、絞りの WSを服部良也邸で行いました。初めてのくくり作業や絞り作業はとても新鮮で、みな悪戦苦闘をしながらも持ち寄った愛着のある服に、思い思いのデザインをしていきました。くくり作業の後には、スズサンさんで現代的な絞りの表現を教わりました。その後、久野染工さんに染作業を体験させてもらいました。絞りを川上から川下まで体験できる貴重なWSを開催することが出来ました。
そして、2月には有松ゼミナール vol.2が行われ、その一環として服部良也邸土蔵にて、服部良也邸の貴重品の展示の企画・設営を行いました。県指定の重要文化財での展示のため、展示品のみならず土蔵の空間を体感できるような展示計画を心がけました。
このような取り組みを通して、現在は有松存在する銭湯「東湯」の改修案を検討しています。
今後も服部良也邸、延いては有松をフィールドに取り組みを続けていきます。

まり木綿さん・服部安輝枝さんと無印良品店でWSを行いました。

服部良也邸の公開に伴い、貴重な貯蔵品の展示計画を行いました。

久野染工さんによる有松絞りのWSを服部良也邸で行いました。

現在は有松にある旧銭湯の「東湯」の改修案を検討しています。

有松での取り組み、始まっています。

名城大学では、平成26年度から「地域大学連携による歴史的建築の活用実践教育プログラム開発」と題して、このパネルの展示場所となっている服部良也家住宅を基点に、有松での様々な活動に取り組んでいます。大学の研究室内にとどまらない、地域／社会と連携した、アクティブで実践的な教育や研究の場をつくっていくことがその目的です。

平成27年度は、学生による塀のデザイン・製作や町家でのアート展示、各種のワークショップや見学会・研究会・シンポジウムなどを、理工学部建築学科の学生・教員が中心となり実施してきました。詳しくは展示されているパネルをご覧ください。平成28年度も、「旧銭湯のリノベーション計画」や「歩けるまちづくり」研究、「空き家問題」への取り組み、「果樹や農を軸とした地域交流」など、分野を横断した各種プロジェクトにより、有松における教育・研究と地域活動のコラボレーションを進めていく予定です。

有松の美しい歴史的街並や有松絞に代表される文化は、地域の方々の持続的な努力により維持されてきました。今年に名古屋市では初めて、国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定されたことは、その喜ばしい成果です。その一方で、歴史的建築物を維持していくための負担は、決して軽いものではありません。名城大学では、有松を教育・研究の場としてお借りしながら、同時に有松の街を守り、よりよくしていくためのお手伝いができればと考えています。

パネル制作：名城大学理工学部建築学科柳沢研究室プロジェクト参加研究室（2016年時点）：理工学部建築学科／武藤研・三浦研・柳沢研、都市情報学部／海道研、農学部附属農場／中尾研